

2022年

5月第1・2・3週の主日礼拝説教要約

・ 5月 1日：ヨハネ福音書 2：19-25.

「永遠の神殿 - 過越祭Ⅰ。」

・ 5月 8日：ヨハネ福音書 6：60-66.

「共に歩む時とは - 過越祭Ⅱ。」

・ 5月15日：ヨハネ福音書 21：4-14.

「再び養われる者達 - 過越祭Ⅲ。」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

イエスの公生涯(洗礼者ヨハネとの出会い～十字架死)が、ほぼ3年足らずの間の出来事であったことを記しているのは、ヨハネ福音書だけです。この福音書には間をおいて、別々の三度の過越祭(2:13, 6:4, 11:55)の時期が、それぞれ「近付いた」ことが明記されており、この記述がイエス・キリストの活動期間の研究には欠かせぬものとなります。

ヨハネ福音書では、イエスの「宮清め」の出来事を受難週の頭ではなく、その2年前の出来事であることを明確にします。カナの婚礼で、初めての徴(ぶどう酒の徴)を見せたイエスが、その足でガリラヤからエルサレムへと移動をして神殿を清めたのだと。

具体的には、神殿で犠牲を献げるための動物の販売や両替商らの取引を、聖所には相応しくない業務だとして、これを追い払ったのです。

しかし、参拝者のユダヤ人たちは、その営業妨害が、誰の権限によるものかを疑問視し、イエスを咎めます。この行為がもし、2年後の受難週の開始と同時に起きていたとすると、彼を尾行していた当局者らの手によってイエスは別件逮捕され、十字架刑までの期間をずっと留置場で過ごすことになっていたのでありましょう。最後の晩餐も洗足も、ゲッセマネの祈りも、実現することなく。

さて、未だ殆ど無名の頃のイエスの行動を発端として、議論は思わぬ方向へと発展します。この神聖なる神殿が、ほぼ40年後にローマ軍の手によって破壊し尽くされることを知っているイエスは、悲惨な未来を知らないユダヤ人に対してけしかけます、「この神殿を壊して見よ、三日で建てなおしてみせる」と。

ヨハネ福音書が完成したのは、まさにそのローマ軍の手による神殿崩壊の後のことです。ユダヤ教徒もキリスト教徒も、詣でるべき神殿はもうありません。しかし後のキリスト教徒は、三日で建てなおされたのがエルサレムの神殿ではなくイエス御自身の身体であったことを、使徒たちに倣って理解するようになり、やがて、キリスト教会こそが、イエスの永遠の身体を受け継ぐものであることを悟りました。この精神は、今でもそのまま受け継がれています。

さらにこの過越祭のエピソードでイエスが明らかにしたことは、やがて崩壊するエルサレムの神殿にかわり「教会」は、物心両面で神殿が昇華したものとして、なおも存続し、宣教の拠点となっていくことでした。

ヨハネ福音書の6章の頭に「過越祭が近付いた」ことが、さらに7章の頭には「仮庵祭が近付いた」ことが、それぞれ記されています。前者が、イエスの公生涯二度目の過越祭であったことは明白です。ヨハネ福音書によると、イエスが大勢の弟子を失ったのもこの(前者の)時期であったことを教えています。

この時期、イエスは、多くの弟子や群衆らを従えて、モーセの如く行進することもあれば、突然、姿を消して、誰もが右往左往することもありました。群衆らが、お目当てのイエスを見失っていたのも、その日のことでした。空腹を満たしてくれるイエスこそ、王に相応しい偉大な人物であると信じ、誰もが事ある毎にイエスに即位を要求しつづけていたのです。

ただ、イエスが王位に就くには、革命を起こす以外に方法は無く、空腹の群衆が自分の生活をなげうって、イエスのために流血の事態を受け入れるはずもありません。いや、それ以前にイエスがこの世の王位に就く意志も全くありませんでした。

歴史を紐解くと古代イスラエルには、代々思慮を欠いた愚かな王たちが現われて、稀に正しい王が立っても、改革は長続きせず、これを厳しく糾弾する預言者らと対立し、彼らの警告は無視されて、王国は次々と滅び去ることになります。後のユダヤ人が、シナゴークで読み聞く(旧約)聖書朗読では包み隠さず古代の権力者の愚行が語られ、群衆にも民族の歴史は熟知されておりました。そんなユダヤに、突然現われたのが稀代の預言者ナザレのイエスです、彼こそ王位に就くに相応しい人物だともてはやされたのでした。

逆に、イエスの彼らに対する要求は彼らの理解をはるかに超えるものでした。「私の肉は真の食物、私の血は真の飲み物(ヨハ福音書6:55)」、これを食べ、また飲め、というものです。あなたがたこそ、先祖からの血肉をそのまま受け継ぐものであってはならぬ。新しい命、永遠の命を生きるために。けれどもこのメッセージは、弟子の理解も、また群衆らの理解も得られませんでした。

その時までイエスが人々に与えていたものは、彼らの肉の命を代々受け継ぐために必要な食料に過ぎません。神の被造物である人間が、本来、生きるべき霊の命に至るには、肉の糧ではない霊の糧(イエスの肉と血)を食する以外にはなかったのです。

イエスの三度目の過越祭とは、言うまでもなく十字架と復活の時でした。そこから聖霊降臨の日まで復活節の教会暦は継続されます。復活したイエスは公生涯のイエスとは異なり、弟子たちを連れて村や町に出向くことはしません。

むしろ、弟子たちの居場所にどこからともなく出現し、彼らが路頭に迷うことがないように、進路を切り開き、指示を与えています。

彼らの迷妄は消滅したものの、神と人とのあるべき関係を保つ知識はなく、かのエデンの園におけるアダムとイブの如く、ただただ、オロオロするばかり。イエスが再びモーセの如く、強引に彼らを率いてくれるのを待っているかのようなのです。この場面では、それ以上、神の御旨も人の心も察することはできません。

また、彼らの空腹は霊の不足によるのではなく肉の欲求のなせる業です。前回の過越祭の頃、多くの弟子たちがイエスの許を去っていった時の問題はそのままここでも継続されます。彼らにはこの時点で、何かを悟る機会はまだ与えられてはいないのです。

ガリラヤ湖のほとりの会食は、最後の晩餐でも、天上の宴でもない、素朴な、ただの屋外のキャンプを連想させるようなものです。後の教会の教義とは一切無縁の出来事です。不漁により、空腹で悩む弟子たちにイエスが獲らせた大漁の魚の一部が、岸で、炭で焼かれています。パンはイエスが用意したものでしょうか、すぐに空腹は満たされたようです。

この後、イエスは彼らの前で、羊飼いの例にならって、改めてペトロをリーダーとすることを宣言します。細かい指示は一切無く。

福音書の記者らの記した、イエスの復活から昇天までの間(40日間)の出来事は統一性を欠き、情報の多少にかかわらず、各自自由に記載しています。

ただ、ヨハネ福音書は直前の(生前の)イエスの敵対者らの視点や見解なども多く記しており、その情報網が広範囲に及んでいたことを示唆しています。一方、復活後のイエスが当局者の目からは完全に解放されていたことは、それぞれの福音書に堂々と記されています。信じた人々の前にだけ、イエスは姿を現したことも。使徒パウロの死後に、世に出た福音書の記者たちの中で、パウロが復活のイエスと出会ったとの情報を得ていたのは、唯一人、使徒言行録をも記したルカだけでした。